

灰の水曜日

マタイ 6・1-6, 16-18

2018.2.14

高円寺教会 19:30 ミサ

うめざき たかいち  
クラレチアン宣教会 梅崎 隆一神父

社会の中では人に注目されることがステップアップにつながっていくと考えられています。ですから、インターネットで注目を浴びたり、有名なカリスマ社長になる、あるいは文学賞をもらったりすることによって夢を叶えることができると考えられている。しかし聖書には「隠れたところで見ておられる父が報いてくださる」と書かれています。ですからわたしが修道会に入った10代の頃、修道院の中で修道者はそのような理想を実現し生きているに違いないと思っていました。しかし、生活が始まって分かったのは、修道者の世界も評価が高い人が優遇されるので、この世の価値と変わらない世界だということでした。

そして時には自分の身に覚えのないことで迫害されることもあったりして、イエスは「そんなときには喜びなさい」と言われますが、ちっとも喜べなかったことを思い出したりもします。更にわたしたちの修道会が携わっている教会を眺めてみると、神父さんが「いい人だ」と評価する人ほど周りの人に迷惑をかけていることも多かった。偽善的である方が教会の中では生きやすいということも教えてもらいました。こうして聖書の言葉は、みことばであるのに、単なる標語とか方便にすり替えられていきます。

「偽善者」という言葉は、ギリシャ語の原語では「俳優」という意味があるそうです。当時のギリシャでは俳優は仮面をかぶって演劇をします。いくらゼウスというギリシャの神様の仮面をかぶっていても、仮面の下からは人間の声が出てくる。偽善者というのは演劇をする人のイメージ、本当の自分ではなく嘘の自分を演じている人のイメージとして語られている。日本昔話風に言うなら、美女に化けた狸の尻尾が見えているのと同じです。見た眼は美しくても本質は人間らしくないというメッセージになっている。

イエスは福音を通して、わたしたちに実生活において役者の生活をやめることを勧めている。わたしたちは知らず知らずのうちに人から良く見られ、愛されようと頑張ります。そのために相手の求める役を無理に引き受けてしまうことがあります。そのほうが生きやすいというふうに考えたりもする。こうして人は生きる中でいろんな役割を演じることを余儀なくされている。しかしイエスは、そんなに無理しなくてもいいし、背伸びもしなくてもいい、人から評価されるということもそんなに心配しなくてもいいとことをわたしたちに教えて

くださいます。迫害を受けたとしても、あなたのその行いが真実のものであれば、それは神の国のパン種となり、永遠になくならない価値を産み出すことをわたしたちに教えてください。

人は弱さから、人からの価値を求めて、人から求められる仮面をかぶって演劇をします。でもこの回心の季節、天の父から求められている神の子どもとしての役を演じることで充分だと思います。わたしたちはそれに集中し、移ろいやすい人からの評価や金や銀のようにいつか朽ちてしまうもののためではなく、いつまでも残る永遠の価値を求めて生きることができますよう共に祈りましょう。